

# 思い出の記

地域構想学科卒業生 木村善貴

## 1 はじめに

私は平成23年に教養学部地域構想学科に入学しました。平成27年3月に卒業し、4月から中学校社会科教諭になり、柴田郡村田町で初任3年間の教員生活を経て、平成30年から美里町立小牛田中学校に勤務しております。東北学院大学という学びの場に身を置くことができたおかげで、多くの先生方にお会いすることができ、また多くの友人と学びを共にすることができました。振り返ってみると、大学時代の多くの人との出会いや経験が今の私の基盤となっていることに気付きます。東北学院大学で4年間お世話になった先生方や友人たちとの思い出を辿りながら、東北学院大学での経験や現在の教員生活について記してみたいと思います。

## 2 地域構想学科での学びと教員への道

私は、2011年東日本大震災が起きた年に東北学院大学に入学しました。高校を卒業し、4月からどんな大学生活が始まるのだろうと期待で胸がいっぱいだった時にあの震災が発生しました。いったい私の大学生活はどうなってしまうのだろうと不安な日々を送りながら3月、4月を自宅で過ごし、1ヶ月遅れの5月に土樋キャンパスで行われた「新入生オリエンテーション」に参加しました。土樋キャンパスには、まだ復旧工事の資材が山積みであったことを記憶しています。私が4年間通うこととなる泉キャンパスも被害が大きく復旧工事がなされていきました。劇的な幕開けで始まった大学生活でしたが、多くの友人とすぐに意気投合し、大学での学びが始まりました。

地域構想学科は、「人と自然」、「健康と福祉」、「社会と産業」という3つの領域からグローバルな視野をもち、よりよい地域をつくるために学ぶ学科であることから、「こんな見方や考え方があるのか」といつも楽しみながら講義を受けることができました。また、講義だけでなく、様々な場所に調査に行き、足を使って地域を調査するフィールドワークは驚きと発

見の連続で、特に楽しい活動でした。様々な視点から地域を見て、考え、調査する活動は、現在の社会科の授業づくりにもとても活かされていると感じています。

1年生の「地域構想学基礎講読」の授業で、のちに3・4年生のゼミでお世話になる岩動志乃夫先生に初めてお会いしました。先生の初めての授業は、自己紹介から始まりました。学生が自己紹介をしていく中で、岩動先生は生徒一人一人の出身地の特産品や歴史的な背景、そして、地理的な要素などを関連づけながら質問や話をされていました。その圧倒的な知識量とユーモアを交えて話す姿に、憧れを抱いたのを覚えています。また、その時に岩動先生に教えていただいたことは、「大学での学びと高校までの学びとの違い」でした。「高校までは、教科書の内容を必死になって覚えることが多く学習することが決まっている。しかし、大学での学びは、幅広い教養や専門性を身に付け、研究を行うための方法や姿勢を学び、自分たちで様々な問題を解決していく力を身に付けることである」という趣旨の内容を話されました。岩動先生は、私たちに「なぜ学ぶのか、何のために生きるのか、それを踏まえて、今何をすべきなのかを考えなさい」と説いてくださいました。その言葉は、現在でも私の中で大切にしている言葉であり、目の前の生徒にも同じように伝えていきます。

2年生になると地域構想発展実習で地域の調査を行うようになりました。前期は、「健康と福祉」の領域の専門である増子正先生に地域を調査する方法や手段、報告書の書き方など一から丁寧にご指導していただきました。初めての調査は、大学近くの山の寺地区の福祉の現状と社会福祉協議会の取り組みについてでした。地区にある洞雲寺の住職さんや地区社会福祉協議会へのヒアリング、高齢者サロンへの参加など初めてのことが多くありましたが、友人と意見を出し合って、調査を進め、まとめていくという作業が地域構想学科で学ぶ良さだと改めて実感した実習でもありました。大学裏の永和台地区の「地域通貨」の調査を進めていくうちに、地区の夏祭りに招待され、大学生に何か一つ余興をしてほしいとの要望があったので、大学から始めた、覚えてたのギターを片手に、友人と一曲披露したこともありました。地区の行事に参加することなど、小学生から高齢者まで様々な方々と交流することができるのも地域構想学科の魅力だと思いました。

2年生後期の地域構想発展実習、3・4年生のゼミは、「社会と産業」の領域の専門である岩動先生にご指導いただきました。この頃初めて論文を読み、その内容をB4一枚に要約し、発表するというのをしました。初めのうちは論文に書いてある語句を理解するのが精一杯でなかなか理解ができず悪戦苦闘したのを覚えています。しかし、自分で論文を調べ、資料を作成し、発表するというのを繰り返し行うことで自信がつき、友人のレポート発表を聞き、議論し合うことで「読み、書き、話す、討論する」という力が身に付きました。この学習のおかげで現在、事務作業や各種行事の企画・運営などを滞りなく進めることにつながっ

ていると思っています。

3年生の時には、3泊4日で岩手県宮古市に行き、丸2日かけて、宮古市田老地区の仮設商店街「たろちゃんハウス」の店舗経営者と仮設商店街に来店する来客者に聞き取り調査を行いました。この4日間は、震災の凄さや、そこに住む人たちの生活はもちろんのこと、来客者に対する聞き取り調査では、声をかけても調査に協力してくれない人も多くいて困難も多くあったのを記憶しています。改めてコミュニケーションスキルを磨かなければならないと感じた合宿でもありました。また、秋には秋田県大曲市に行き、大曲農都協議会主催の大曲地域や大仙市の歴史と食を巡り、地域の魅力の発掘や観光資源としての活用を調査することを目的としたモニタリングツアーに参加しました。年に何度か合宿に行くことで、ゼミの仲間たちとも交流が深まり、お互いに切磋琢磨できる関係にもなりました。「少しでも良い報告書をつくらう」とゼミが無い日も予定を合わせて報告書づくりに没頭したこともありました。もちろんゼミ活動だけでなく、ゼミ生みんなでお酒を飲んだり、岩動先生のご自宅にゼミ生一同でお邪魔し、様々なことを語ったのも良い思い出です。大学時代に互いに高めあえる存在に出会えたことは本当に幸せなことだと今になっても思います。

4年生の時には、卒論の作成になりました。岩動先生は、どのような先行研究の論文を読むべきなのか、卒論の構成はどのようにすればよいのかといった段階から丁寧に話を聞いてくださり、その都度、的確な助言をしていただきました。また、毎回の卒論の進捗状況の発表では、ゼミの仲間にも様々なアドバイスをもらいました。「宮城県における公立小中学校の廃校跡地利用」についての論文を書き上げることができたのは、ゼミの仲間たちの存在や岩動先生がいつも時間をさいて、いつでも親身に対応して下さったからでした。中学生の話に耳を傾け、生徒一人一人に親身に対応しようと心掛けることができるのは、岩動先生にこのような指導を受けたからだと考えています。

ゼミ活動に力を入れる一方で、自分の夢である「中学校教師」を目指すために、教職課程センターの先生方にも、多くのご指導をいただきました。特に、人間科学科の坪田益美先生、教職課程センター相談員の大山芳宏先生には、指導案の書き方から、授業のつくり方、指導法などきめ細やかにご指導いただきました。指導案をつくり、実際に模擬授業をするのは想像よりもはるかに困難で、指導案は赤ペンいっぱい修正されたこともありました。どのような授業が子どもたちの知的好奇心を刺激し、「楽しい」と思える授業がつけられるのかを同じ教員を志す仲間と考えたことも多々ありました。何度も何度も試行錯誤を重ねた経験が現在の授業づくりの基盤になっていると感じています。

現在でも、坪田先生、大山先生をはじめ、八幡恵先生、菊地茂樹先生にもアドバイスをいただき、自己研鑽に励んでいるところです。

時に優しく時に厳しく、愛のこもったご指導で励ましていただいたおかげで、教員採用試験という大きな壁を乗り越えることができました。

#### 4 おわりに

「先生、先生！」と呼ばれるようになってからあっという間に4年目を迎えました。現在は3年生31人の担任をしています。とても素直で明るい生徒たちと一緒に成長できるよう、日々笑顔を大切に、全力で生活しています。私は、生徒の成長に携われることがこの仕事の最大の魅力だと感じています。もちろん忙しい時もあれば、大変なことも少なくありません。しかし、生徒の成長の過程に携われる喜びや生徒と共に分かち合う感動があれば、どんなに辛いことがあっても一瞬でその苦勞が報われます。

私は「教師が変われば、子どもの未来が変わる」という言葉を常に意識しています。私たち教師が学ぶこと、努力することを継続していくことが生徒の成長を促すことにつながると考えています。この言葉を意識するようになったのも、学生時代、常に新しいことを学び続け、熱心にご指導いただいた東北学院大学の先生方の姿を見ていたからだと思っています。

日常生活の中には、自らの可能性を伸ばす機会がたくさんあります。私はそれをこの東北学院大学に通い、強く実感することができました。講義やゼミ、サークル活動、アルバイトなど経験したこと全てが私の基礎となり、現在の生活に役立っています。

東北学院大学という場で学んだことを発信し、子どもたちの自己実現の可能性を少しでも高められるよう、これからも学び続ける教師でありたいと思います。



#### 経歴

卒業年度：平成26年度（平成27年3月卒業）

卒業学科：教養学部地域構想学科

ゼミ担当教員名：岩動志乃夫先生

現職：美里町立小牛田中学校教諭（社会科）

男子バスケットボール部顧問